



桃五だより



No.612

(6月号)

2022.6.1

杉並区立桃井第五小学校

<https://www.suginami-school.ed.jp/momo5shoubg/>

子供たちに「恵みの雨」を

主幹教諭 山田 章浩

梅雨の時季になりました。気温が高い日が多く、湿度も高い日が続くムシムシする梅雨。毎年「不快指数」という言葉が出始めるのもこの頃ではないでしょうか。長い間、分厚い雲に覆われた空を見ると「ああ、スカッと抜けたような青空と燦燦と輝く太陽が見たい…」と思う方も多いかと思います。

梅雨と言えば、切っても切れないのが「雨」です。学校現場においても、この「雨」は度々私たち教員の頭を悩ませます。最も代表的なのは運動会です。1ヶ月以上かけて子供たちと共に準備を進めていきますが、「雨のため校庭での練習ができない」「雨による順延の予定」など「雨が降ったら」を常に考慮しながら計画をします。特に運動会の一週間前になると、体育主任と管理職は、週間天気予報とのにらめっこを続けます。予報が少し変化する度に一喜一憂する日々…。一番悩ましいのは、当日の天気予報が「曇り時々雨。降水確率60%」のような微妙な時です。当日の朝ぎりぎりまで開催するか否かで悩むこともあります。また、高学年の移動教室も「雨」に左右されます。登山やハイキングでは、途中で雨が降ることも想定して折り畳み傘やレインウェアの荷物を準備します。晴れた場合のプログラムができなかった時のために「雨プログラム」も準備します。子供たちにとっては一生に一度の思い出です。できれば青空の下で3日間を過ごさせたいと毎回思います。

このように「雨」に悩まされることが多い学校ですが、調べてみると昔から日本人は「雨」を肯定的にとらえ、素敵な言葉を作り、残してきました。

慈雨：日照り続きの時の降る恵みの雨。

翠雨：草木の青葉に降る雨。

甘雨：草木を潤して育てる恵みの雨。

瑞雨：穀物の生長を助ける雨。

初夏を彩る緑の葉に、雨の雫が落ちるような美しい情景や「しとしと」という実際の音ではない「美しい音」が想像でき、雨の有難さや雨の優しさを昔の人々が感じ、大事にしていたのが伝わります。

一方近年では「ゲリラ豪雨」や「集中豪雨」による河川の氾濫や土砂崩れなどの自然災害が毎年のように起きています。「降りすぎる」ことによる災害です。被害の状況を伝えるニュースを見る度に心が痛みます。

教育を「雨」に喩えた時、私たち大人は子供たちにとってどのような「雨」を降らせるとよいのでしょうか。

できるようになれば、次から次へと道具や答えを与えてその場の心を満たしていくような雨。失敗しないようにけがをしないようにと、あらかじめ真っ平に舗装し、でこぼこのない道の上を何不自由なく歩かせ、成功したように思わせる雨。そんな雨ばかりでよいのでしょうか。これら全てを否定はしません。人により、時により必要な場合があります。ただ、常に「降らせすぎ」でよいのかと思うのです。

子供たちが困っている時にそっと手を差し伸べるような慈雨。子供たちの心と体を潤し、学ぼうとする意欲を伸ばしていく甘雨や瑞雨。そして、一つ一つの小さな花(子供たち)が、たくさん集まり大きな美しい花となる紫陽花に優しく降る翠雨。

子供たちがすすんで学び、多くの人と関わり合いながら生き生きと毎日を過ごし、大きな花を咲かせるような、優しく、丁度よい「雨」を降らせたいものです。

植物にも、動物にも恵みをもたらす雨。私たち大人も、子供たちに「恵みの雨」を降らせていきましょう。

6月の生活指導目標

校舎内での過ごし方を工夫しよう

6月になり、梅雨を迎えます。雨の日の過ごし方を工夫し、階段やオープンスペースの歩き方をさらに気を付けて、怪我なく安全に学校生活が過ごせるようにしていきたいと思います。「これぐらいいいかな。」という気持ちに流されず、約束を守り落ち着いた行動ができるよう、学校全体で指導していきます。